

華嚴禅学研究論文集 第一輯（改訂版）

日本印度学仏教学会 第六十六回学術大会発表論文

神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだ

博士（文学） 小島岱山 著

華嚴学研究所

目次

はじめに	3
一 李通玄の生没年代と著作年代	6
二 神会の生没年代並びに李通玄との生没年代上及び撰述年代上の関係	10
三 神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだ	14

四

何故に神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだ

ことを隠したのか ……………

23

おわりに ……………

28

あとがき ……………

31

はじめに

まさか、の出来事が起こった。神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだのである。無念の思想と境界と言え、『六祖壇経』に「無念を立てて宗と為す」とあるように、又、『神会語録』にも全く同じく「無念を立てて宗と為す」とあるように、南宗禅の根本の思想と境界とであり、神会の禅の根本の思想と境界とでもある。その無念の思想と境界とが李通玄に由来することを本拙書は論證するものである。胡^こ適^{せき}も、鈴木大拙も、宇井伯壽も、柳田聖山も、誰一人、気づかなかったことであり、禅思想研究上の、或いは、禅思想史研究上の大発見であると自負する次第である。

従来の禅思想研究の、或いは禅思想史研究の基準の人物は教禅一致説を唱えた宗^{しゅう}密^{みつ}であり、基準の典籍は宗密の『禅源諸詮集都序』であるが、これからは、基準の人物は教禅相即円融（説）の立場に立つ李通玄ということになり、基準の典籍は李通玄の『新華嚴経論』四十巻と『略积新華嚴経修行次第决疑論』四巻と『解^げ明^{みょう}顕^{けん}』

『智成悲十明論』ちじょうひじゅうみょうろん 一卷ということになる。禅思想研究も禅思想史研究も大転換を、大変革をせまられることになったというわけである。

すなわち、胡適、鈴木大拙、宇井伯壽、柳田聖山らによる南宗禅思想・思想史研究のすべてが、とりわけその根本的な部分が、いや南宗禅思想・思想史に関する過去の研究のすべてが、土台の部分の崩壊により、砂上の楼閣と化してしまったということである。勿論、宗密の教禅一致説なども、とりわけその根本的な部分は、いや枝末の部分に到るまで、これ又、砂上の楼閣と化してしまったということになる。何となれば、後で詳しく論ずるが、李通玄の教即禅の禅が、教禅相即円融の禅が、そのまま南宗禅そのものであるのだから、一致も何もないからである。一致も何もない、と言い得る根本の理由わけは、論ずるまでもなく教禅一致説というのは、教と禅とが本来、分離していることを前提にした学説だからである。ということは、宗密に軸足を置いた石井修道や吉津宜英をはじめとする多くの禅学者たちの諸研究も、やはりその根本的な部分が、いやその枝葉の部分までもが、幻の楼閣の存在と

化してしまつたということになる。

なお、使用したテキストは、『大正大蔵経』（「大正」と略称）所収のものと楊曾文編『神会和尚禪話録』（「神録」と略称）とである。

平成二十七年八月二十八日

真義臨濟禪宗 宗祖
華嚴学研究所 所長 小島岱山
博士（文学）

富士北麓 華嚴三聖円融観法修禪堂にて記す。

一 李通玄の生没年代と著作年代

李通玄は西暦六三五年に中国山西省の省都、太原（唐代には北京と称されたこともある）で生まれ、西暦七三〇年に同じく山西省の寿陽県の方山で亡くなった。数え年^{どし}で九十六歳での示寂ということになる。李通玄が仏学に志したのは四十二、三歳の頃であり、それまでは易を中心とした三玄の学の研究に携わっていたが、三玄の学には慈悲の心行^{しんぎょう}がないことに不満を感じ、心を『華嚴経』の研究に移した。仏教については晩学であったために、『八十卷華嚴経』の注釈書である主著の『新華嚴経論』四十巻を著したのは、李通玄が七十五歳から八十五歳にかけての時であり、八十五歳から九十歳までの間に、『略釈新華嚴経修行次第決疑論』（以下、『決疑論』と略称）四巻を撰述し、空思想の實踐論書である『解明顕智成悲十明論』（以下、『十明論』と略称）一巻を著したのは、九十歳を過ぎてからである。以上の李通玄の著作を撰述年代順に記すと、『新華嚴経論』四十巻は西暦七二〇年頃までには、又、『決

疑論』は西暦七二五年頃までには、さらには『十明論』は西暦七三〇年（李通玄の示寂の年）までには、それぞれ撰述されていたと知られる。

ついでながら、李通玄の中国仏教に於ける華嚴思想史上の位置について、又、今日に至るまで全く忘れ去られていた李通玄の禅とその思想的特質とについて極めて簡単にではあるが述べておこう。中国華嚴思想の流れには、智儼、法蔵、澄観、宗密と続く、終南山系華嚴思想の流れと、靈弁、解脱、明曜、李通玄と続く、五台山系華嚴思想の流れとの二つの大きな流れがあった。前者の終南山系華嚴思想の流れは、貴族的で理論的な華嚴思想の流れであり、『華嚴経』そのものからは離れた、教学に依る華嚴思想、すなわち「無」を頓教の禅に、「一即一切」を華嚴一乘円教に配した、禅と教とが分離した華嚴思想であり、したがって一を根本とする一即一切の構造の華嚴思想の流れとなっている。この終南山系華嚴思想の大成者は法蔵である。一方、後者の五台山系華嚴思想の流れは、民衆的で実践的な華嚴思想の流れであり、『華嚴経』そのものに基づく、『華嚴経』の全品思想を踏まえた華嚴思想、

すなわち、例えば『八十卷華嚴經』の「入法界品」に「心に分別無くして普く諸法を知り（||教）、一身端坐して法界に充滿す（||禪）」とある通り、教と禪とが教即禪となっている、つまりは教と禪とが相即円融している、要するに教禪相即円融の華嚴思想の流れであり、したがって、例えば同じく『八十卷華嚴經』の「光明覺品」に「一念に（||一）無量劫を觀ずるは（||一切）、去くこと無く來ること無く、亦、住まること無ければなり（||無）」とある通り、無（空）を根本とする一即一切即無の構造の華嚴思想の流れとなっている。この五台山系華嚴思想の大成者は李通玄である。

ところで李通玄は、教禪相即円融の立場を踏まえた法界自性無修無證無作無相無心禪（主に『決疑論』に述べられているが、李通玄の全著作から関連の思想、境界を取り出して、筆者が此の様にまとめたもの。なお「法界自性」は「法界の自性は」の意味である。なお又、「法界」を「一切諸法」と置き換えてもよい）という極頓の禪を構築している。この極頓の禪によって、李通玄は無念という悟りの境界を体

得した。「無念力」(大正三六、七八〇中)という言葉が、そのことを端的に證明している。後で述べるように、この李通玄の無念という悟りの境界に注目し、李通玄から学んだ、その無念という悟りの境界を自らの禅の根本に据えたのが神会であったのであり、したがって「無念を立てて宗と為す」(大正三八、三三八下。神録・正編一〇頁)というのが南宗禅であるのだから、南宗禅の實質上の祖は李通玄ということになる。

しかしながら、神会、澄観(七三八〜八三九)、宗密(七八〇〜八四一)らによって、この李通玄の極頓の禅は隠蔽され、排除され、黙殺され、抹殺され続けたのであるが、本拙論に於いて、実に千三百年ぶりに漸く日の目を見ることになったというわけである。なお、何故に、この李通玄の極頓の禅が隠蔽、排除、黙殺、抹殺されることになってしまったのか、については、本拙書の「四 何故に神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだことを隠したのか」を御参照下さい。

二 神会の生没年代並びに李通玄との生没年代上及び撰述年代上の関係

次に神会であるが、神会は西暦六八四年、湖北省の襄陽に生まれ、西暦七五八年、湖北省の荊州開元寺般若院で示寂したとされる。世寿は数え年で七十五歳となる。李通玄が四十九歳の時に神会は出生し、李通玄が寂した時、神会は四十六歳であった。又、李通玄が主著の『新華嚴経論』四十巻の執筆に専念していたのは、神会が二十代の半ばなかから三十代の半ばにかけての頃である。したがって、神会には三十代の半ば以後、示寂とじの年に至るまで『新華嚴経論』四十巻を研究する時間が充分すぎるほどにあつたということになる。勿論、李通玄の他の著作にも目を通すことはできたのであり、事実、神会の般若の空智慧への確信は、李通玄の最後の著作であり、実質上、南宗禅の根本の実践書と言える『十明論』を読んでのことであろう。

李通玄の『新華嚴経論』四十巻は、『六十巻華嚴経』よりも遙かに整った内容となつている『八十巻華嚴経』についての、しかも新着の『八十巻華嚴経』についての最

初のまとまった、全品にわたる注釈書であり、さらには、この『八十卷華嚴經』に對しては則天武后が唐王朝を支える、唐王朝を象徴する經典であると宣言したので、李通玄の『新華嚴經論』四十卷は、出版直後より世の注目を大いに浴びることになったにちがいない。その一人が神会であつたというわけである。李通玄の『新華嚴經論』の伝播は、我々が考えるよりも、はるかに早かつたものと思われる。というのは、李通玄が住していた、しかも唐王朝の発祥の地である太原は、則天武后が事実上、唐王朝の権力を奪取した西暦六八四年を境に、長安と急速に緊密な關係になつたと推測される。何となれば則天武后が太原の出身だからである。それから約三十五年後、李通玄の著作が次々と出版されるようになった時代には、太原と長安とは、一層緊密な状態になつていたことは間違ひなく、したがつて、例えば李通玄の動向も、ほとんどリアルタイムで、逐一、長安の人々の耳に入つていたことであろう。その上、李通玄は唐王朝の本家筋に当たる家系の一員であつたのであり、太原生まれの李通玄には、太原にも、又、長安にも唐王朝の關係者を中心とする多くの支援者が

存在していたにちがいない。そうでなければ、現代であっても研究書一冊さえ出版することが甚だ困難であるというのに、今から千三百年も前に、残っているだけでも四十五巻もの研究書を上梓できるなどということは、到底、不可能なことであろう。李通玄がある程度、原稿を書き上げる度ごとに、太原での、或いは長安での多くの支援者たちが、次々と、部数多く、書写していったものと考えられる。このようなわけで、李通玄の著作の伝播は、我々が予想する以上にはるかに早かったものと推測される。

神会が南陽（河南省）の竜興寺に入寺したのは、開元八年、西暦七二〇年、神会が三十六歳の時であり、奇しくも李通玄が『新華嚴経論』四十巻を完成し、出版した年と推測される、正まさにその年（勿論、この年以前に出版されていた可能性も充分ある）に当たっている。神会は竜興寺に入寺し、早速、李通玄の『新華嚴経論』四十巻を取り寄せたにちがいない。有名な「北宗」批判の法会、すなわち滑台かつだい（河南省）の大雲寺での宗論を神会が行ったのは開元二〇年、西暦七三二年、神会、四十

八歳の時である。神会は、この滑台の宗論までの十二年間、李通玄の『新華嚴経論』四十卷をはじめ、李通玄の総すべての著作を徹底研究したにちがいない。そして、その成果が滑台での宗論ということになる。そして、神会が『新華嚴経論』四十卷をはじめ、李通玄の著作を読んで最も注目した所は、当然ながら李通玄が無念という悟りの境界を体得した極頓の無修、無證、無作、無相、無心の禅、すなわち、法界自性無修無證無作無相無心禅を主張していた点であつたであろう。そうであるならば、「無念を立てて宗と為す」（大正四八、三三八下。神録・正編一〇頁）というのが南宗禅であるのだから、南宗禅は実質的には、慧能の無住の体験から始まったのではなく、李通玄の法界自性無修無證無作無相無心禅という極頓の禅体験による無念の体得から出発したのだということになるのではなからうか。この点については、詳しくは別書『南宗禅の祖は李通玄である』（山喜房仏書林より発売予定）を御参照いただけるものならば幸いである。

三 神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだ

神会が李通玄に注目することになった根本の理由は次の如くである。神会が真の師と仰いだ慧能は「おうむしよじゆうにしようごしん 応無所住而生其心まさ（応に住する所無くして其の心を生ずべし）」（大正八、七四九下）で、すなわち無住の思想で開悟したわけであるが、慧能自身は無住の哲学的、或いは思想的意味などについては一切語らなかつたものと推測される。しかしながら神会に在っては、神会の前師の神秀への対抗上、神会としてはどうしても無住の哲学的、或いは思想的意味を知る必要があつたのであり、そのよ^うな心境の中で、李通玄の『新華嚴経論』四十巻に目を通していたところ、『新華嚴経論』巻九（大正三六、七七三下）に、

問うて曰く、云何が仏の出興を見るや。答えて曰く、当に自身を見るべし。無身、無心、無出、無没、無内、無外、不動、不寂、無思、無求、世と及び出世とに都て住処無く、心所法無く、法法無く、心心法無く、依性無く、始末無し。

無依住智を以て斯くの如きの法を説く。衆生を教化して皆悟入せしむ。是を仏の出興を見ると名づく。

とある文章に出会い、深く思いを致すところとなったのではなからうか。すなわち無住の思想が般若の空智慧に結びつけられていたからである。神会が李通玄に深く傾倒することになったのは、無住の思想が般若の空智慧と結びついていることが決り手であったのであり、このことは『南陽和尚問答雜徵義（以下、『雜徵義』と略称）』（神録・正編七五頁）に、

答えて曰く「応に住する所無くして其の心を生ずべし。但無住の心を得れば、即ち解脱を得ん」。

又、問う「無住なるに、若為が無住を知らん」。

答えて曰く「無住の体上に本智有り。本智を以て能く知る。常に本智を令て其の心を生ぜしむ」。

とあることから確認できる。すなわち、無住の思想が見事に本智と合体しているの

が確認される。李通玄の無依住智そのものである。そして般若の空智慧が本智となつており、しかも「無住の体上に本智有り」とあるところから、この本智は明らかに李通玄に由来すると知られる。何となれば李通玄にあつては、一切諸法の体、相、用に相応する智慧を空智慧と名づけ、特に体だけに相応する智慧を根本智と呼んで、その上、李通玄は根本智を略して本智と、しばしば言い表すからである。

さらに他ほかにも無住の思想が般若の空智慧と結びつけられている文章は『新華嚴經論』の中に随処に見うけられる。例えば、『新華嚴經論』巻九には「仏とは、智体が無依住の義なり」（大正三六、七七四下）とある。ここでは、無住は般若の空智慧の体とされており、こうした在り方を仏とするとある。又、同じく『新華嚴經論』巻十には「所有あらゆるの分別の本性は清浄なることを無依住智と名づく。諸仏の根本智の如し。禅波羅蜜の無作の印を以て之これを印す」（大正三六、七八〇下）とあり、正まさにこの文章に出会つてこそ、師の体験した無住の世界の何たるかを、神会は心しん底そこ、徹てつ底てい、理解できたものと考えられる。

以上より、神会が無念の思想と境界とを李通玄より学んだことは明々白々な事実であると知られよう。何となれば、李通玄は『新華嚴経論』四十巻の中で、やはり随处で無念の思想と境界とを語っているからである。では何故に、神会が注目し、採り出したのが無依住智ではなく、無念の思想と境界とであったのであろうか。それは、もう何度も述べているように、極頓の禅である法界自性無修無證無作無相無心禅によつて、李通玄が無念という悟りの境界を体解していたからであり、さらには終南山系華嚴思想の大成者・法蔵（六四五〜七一一）が『華嚴五教章』の中で、五教判を論ずるに当たり、無の頓教を、すなわち禅（＝無）を、具体的に一念不生と定義していたからである。法蔵の、この一念不生という思想を、李通玄は自らみずかの法界自性無修無證無作無相無心禅という極頓の禅体験を通じて無念と体解したのである。したがって、これで三度目の論述となるが、「無念を立てて宗と為す」（大正四八、三三八下。神録・正編一〇頁）というのが南宗禅であるのだから、南宗禅の実質上の始まりは、慧能の無住の禅体験にあるのではなく、李通玄の法界自性無修

無證無作無相無心禪という極頓の禪に基づく無念の禪体験にあると知られよう。

ところで、神会が李通玄を介さずに、直接、法蔵の一念不生から無念を思いついたのではないかとの、或いは無念という言葉が存する『起信論』や『孔目章』などの他の典籍から学んだのではないかとの推測も為し得ようが、以上の論述より、その推論は成り立ち得ないと分かるであろう。しかしながら、神会の主張する無念が李通玄に由来していることを示す確かな証拠を、ここでは一つだけ示しておこう。

李通玄は極頓の禪体験の中で、無念を会得したために、李通玄の無念の理解には、数々のユニークな体験的理解が存在する。中でも最もユニークなものは「一念は無念（なり）」（大正三六、九四〇上）である。この言句は概念的理解の立場からは、或いは思惟の立場からは、矛盾の言句としか受け取れない。だが、『新華嚴経論』卷三十二に「一念は無念にして身心の諸見、已に亡ずるが如きは、便ち如来の無性の妙理の正智慧の家に生ず」（大正三六、九四〇上）とあり、身心俱亡の極頓の禅体験が、そのまま「一念は無念（なり）」の境界であると李通玄は述べてい

る。確かに「一念は無念（なり）」は、李通玄の極頓の禅体験から生まれた言句であると知られる。そして、李通玄の独創になる、この言句が、**ずばり**神会の『雜徵義』の中に出てくる。「無念は即ち是れ一念」（神録・正編九七頁）とあるのがそれである。前後に、その理由を示す文言も一切なく、いきなり「無念は即ち是れ一念」と出てきている。明らかに李通玄から学んだものであると知られよう。

ついでながら、**ざつと**ではあるが、筆者が気づいた限り、無念の思想と境界との外ほかに、神会が李通玄より学んだであろう思想、或いは境界を記しておこう。これらの事柄は、間接的ではあるが、神会は無念の思想と境界とを李通玄より学んだということの証拠となろう。例えば『雜徵義』（神録・正編九二頁）に、

和上言く、（前文、省略）。花嚴経に云く、十信の初に、金剛慧を発し、便ち正覚を成す。菩提の法に、何の次第か有らん。（後文、省略）。

とあり、同じく『雜徵義』（神録・正編一一八頁）に、

和尚云く、（前文、省略）。十信の初発心に、一念相應して便ち正覚を成す。（後

文、省略)。

とある。全体的に観て、李通玄の思想と李通玄が良く使う言葉とから成り立っていると知られる。先ず、前半の引用文中に「花嚴經に云く」とあるが、これは全くの虚偽の言葉であり、本来ならば「李通玄云く」としなければならぬ。何故に「李通玄云く」としなかったのか、については、本拙論の「四 何故に神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだことを隠したのか」を参照していただきたい。さて、前後の引用文は基本的には同じ内容になっている。すなわち、十信位の初心が発菩提心であり、かつ十信位の初心が正覚を成する位であるということである。しかしながら『華嚴經』の原文では、十住位の初心が発菩提心であり、かつ十住位の初心が正覚を成する位である、となっている。この相違は何処から生じたのであるか。言うまでもなく、『新華嚴經論』卷二十九(大正三六、九一九下)に、

初發心に便ち成仏すとは、(中間省略)。以て此れは十信心を説く。

とあり、同じく『新華嚴經論』卷二十九(大正三六、九二一上)中)に、

第二会の普光明殿は、(中間省略)、十箇の智仏を説き、不動智仏を以て首と為し、以て信もて修行を進むるの門と為す。初発菩提心の者をして此の普光明、大智の宅従り、信を起こし、修行を進めしむ。畢竟じて如来の本智、本行、本時を離れずして還つて本仏を成さしむ(普光明殿も普光明、大智の宅も十信位の殿であり宅である。筆者の註)。

とあるからである。勿論、李通玄は『華嚴経』の本来の説である十住位の初心での発菩提心も認め、かつ十住位の初位での成正覚じょうしやうかくも認めている。であるのに李通玄は何故に十信位の初心、初位での発菩提心、成正覚をも敢えて加えて設定したのであろうか。それは、李通玄が、信心は迷いの心であると見做し、さらには、その迷いの心としての信心を悟りの心に転換せんとする行為が修行なのだ和李通玄は理解し、したがって信心は修行の根拠の心であると考えたからである。だから、修行の出発点としての十信位の初心、初位での発菩提心、成正覚が説かれることになったというわけである。李通玄は『華嚴経』を実践の立場から、或いは修行の立場から

把握したのであり、ここの信心に関する李通玄独自の理解のところが、それを象徴する代表の事柄であると言えよう。同じく実践、修行に生きる神会は『華嚴経』の本来の説ではなく、この李通玄の独創の説に大いに感ずるところがあり、李通玄によつて唱えられた十信位の初心、初位での発菩提心、成正覚という学説を取り容れることになったのだと考えられる。この李通玄の学説には、特に神会は感銘を受けたらしく、発菩提心や成正覚をはじめ、これに関連する言葉、言句、思想（例えば、「信心初発心、一念相應便成正覚」、「初発心時、便登仏地、無去来今、畢竟解脱」などを）を神会は随処で繰り返し使っている。

その外、「一念相應、便成正覚」、「衆生本有無師智、自然智」、「十信初発心、一念相應便成正覚」、「無念以為解脱法身」、「如是因果宛然、生滅本無、何仮修習」、「無定乱」、「無證者、道性俱無所得」、「初発心時、便登仏地、無去来今、畢竟解脱」、「一時斉等」、「一時成仏」、「虚空以無大小、亦無中辺」、「神無方所」、「虚無之理」、「一念消除、性体無生」（以上、すべて『雜徴義』の中の言句。何故に、李通玄に密

接に関わる言句、言葉、思想が『雑徴義』に集中しているのかと言えば、『雑徴義』は神会の「表には出せない、裏の実状を、すなわち李通玄から学んだことを自然のうち吐露している、言わば本音」を集めた語録、話録だからである。）など、まだまだ外にもたくさんあるが、これらの言句のすべて、『新華嚴経論』の中の言葉そのものか、或いは神会がアレンジを加えたものである。なお、極頓の禅や戒をはじめ実践に関連した事項に関しては、別書『神会は坐禅の否定や戒の思想も李通玄から学んだ』（山喜房仏書林より発売予定）を御参照いただけるものならば幸いである。

四 何故に神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだことを隠したのか。何故に神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだことを隠したのであろうか。その理由は三つ^{みつ}ある。

一つには、これが根本の理由であるが、誰でもすぐに思い当たるであろうが、もし無念の思想と境界とを李通玄から学んだと明示し、宣言し、公にしたとすれば、「無念を立てて宗と為す」（大正四八、三三八下。神録・正編一〇頁）というのが南宗禅としているわけであるから、当然ながら、李通玄が南宗禅の祖であると世間に向かつて公言することになってしまふ。慧能を六祖に仕立て上げようと目論んで（もくろ）いる神会にとつては、南宗禅の南宗禅たる所以（ゆえん）を示す無念の思想と境界とを李通玄から学んだとは、口が裂けても言えないことである。したがって、無念の思想の典拠も例えば『小品般若波羅蜜經』といった、李通玄の著作ではない典籍に求めることになつたというわけである。

具体的に言えば、例えば前に述べたところの十信位の初心、初位での発菩提心、成正覚の学説に関してであるが、この学説は李通玄しか主張し得ない、李通玄の独創になる学説である。神会は明らかに李通玄の『新華嚴經論』から、この学説を学んでいるにもかかわらず、神会は、李通玄の名をひた隠しに隠し「華嚴經に云く」

と虚偽の言句を述べ、記している。神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだという事実を前述の理由により何としても隠さなければならなかったのである。

二つには、出家者としてのプライドのためである。自らの思想や境界の根幹が在俗の仏教徒、すなわち居士の仏教者から学んだものであるなどは、これ又、出家者としては口が裂けても言えなかったということであろう。この点については何も神会ばかりではなく、李通玄から根本的な思想や境界の部分で大きな影響を受けている学僧や修行僧の全員が、李通玄から学んだことをひた隠しに隠し、李通玄を抹殺せんとしている。その最たる人物が宗密であるが、ここでは時代的に神会に近く、生存年代も重なる澄観かきの悪辣ぶりを御紹介申し上げたい。

澄観は自らの華嚴教学の柱である教判論を構築するに当たり、すなわち実質的な立教開宗に当たり、華嚴思想の全体を大きく、「以義分教」(大正三五、五一二中)と「依教分宗」(大正三五、五一二中)との二つに分けている。しかしながら、これは明らかに李通玄の教判論に於ける二大分類法である「依教分宗」(大正三六、七二一

中)と「依宗教別」(大正三六、七二一中)とを参考にし、取り入れたものであることは確かな事実である。しかしながら、澄観は、一切、全く、このことには口を閉ざしている。李通玄の「李」の字も言っていない。思想の根幹であればこそ、神会と同様に、居士の仏教者・李通玄から学んだとは、口が裂けても言えなかつたというわけである。澄観は、この外にも、みずか自らの観法である三聖円融観についても、又、華嚴という言葉の定義についても、さらには又、仏の定義についても、或いは又、澄観の華嚴哲学の基盤となっている一真法界についても、すべてみな李通玄から学んでいるにもかかわらず、そのことを澄観は、ひた隠しに隠している。以上の論述より、次のことが言えよう。南宗禅の実質上の祖は李通玄であるのに、禅界から李通玄を隠蔽し、排除した、その元凶は神会であったのであり、華嚴界から李通玄を排除し、黙殺した、その元凶は澄観であったのであり、禅界と華嚴界との両方から李通玄を黙殺し、抹殺した、その元凶は宗密であったのである。とりわけ宗密は、『華嚴経』の本来の在り方を示す李通玄の教禅相即円融(説)を一切排除して、

さらには李通玄が無念を体得することになった、しかも南宗禅の根本の禅となった法界自性無修無證無作無相無心禅という極頓の禅を一切黙殺して、さらには又、南宗禅の実質上の祖としての李通玄の存在そのものを一切抹殺して、砂上の楼閣にすぎない教禅一致説を、もつともらしく捏造したのである。

三つには、自己の立場がなくなるからである。自己自身のプライドが許さないと
いうことなので、根本の精神構造としては二つ目と同じである。自らの根幹の思想
や境界が、他者に由来すると明らかになってしまえば、自己の学者としての、或い
は修行者としての存在根拠が失われてしまう。人は、自己の思想や境界の根幹を構
築するに当たり、とりわけ、その核心部分について依拠した典籍や人物を公言する
ことは絶対でない。前述した如く、自己の存在根拠が失われてしまうからである。
神会しかり、澄観しかり、さらには、本拙論では詳細な具体的な例は挙げなかつた
が、宗密しかりである。

おわりに

以上の論述で、神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだのだということが完璧に証明できていると御判断いただけるものと思う。

又、この事実から、南宗禅は実質的には李通玄から始まったのであり、南宗禅の祖は実質上は李通玄であり、さらに言えば、南宗禅の祖は六祖慧能ではないと知られよう。この結果の影響たるや計り知れない。千三百年にわたる南宗禅思想・思想史が、その根本のところ崩壊してしまったわけであり、したがって、南宗禅思想・思想史に関する一切の研究も、又、宗密の教禅一致説も「はじめに」でも論じたように、砂上の楼閣と化してしまったということになる。当然ながら伝統諸禅宗に於ける嗣法の体系、すなわち法系の存在についても、その正統性が消滅してしまっただということであり、したがって伝統諸禅宗そのものの正統性も失われてしまったということにもなる。李通玄の極頓の禅を百パーセント受け継いでいるのは『臨濟

録』のみであり、八十パーセント受け継いでいるのは『大慧語録』のみである。この二種の語録のみ、真正正銘の南宗禅の語録と言える。

さらには、これからの南宗禅思想・思想史研究は、これ又、「はじめに」でも述べたように、人物としては李通玄、典籍としては李通玄の『新華嚴経論』と『決疑論』と『十明論』、学説としては李通玄の教禅相即円融（説）が、それぞれ基準になるということである。さらには又、これからは『六祖壇経』（「坐禅Ⅱ漸悟の修行方法」の実践書）に代わって、李通玄の『十明論』（「観法Ⅱ頓悟の修行方法」の実践書）が南宗禅の根本の実践書ということになる。

最後に『六祖壇経』（以下、『壇経』と略称）について極めて簡単にではあるが論じておこう。既に言われているように『壇経』は神会の手になるものであるのは、筆者も、ほぼ間違いないと考える。それは、『壇経』の思想や境界のほとんどすべてが、李通玄の三種の典籍中の思想や境界と相応するからである。すなわち、『壇経』は、神会が、李通玄の三種の典籍中から取り出した思想や境界を、そっくりそのまま採

用していると思われる部分と、神会がアレンジを加えて採用していると考えられる部分と、さらには李通玄の影を消すために、李通玄とは全く関係のない諸思想や諸境界を諸経典や諸禅籍から取り出して、その取り出した諸思想や諸境界を、李通玄に由来している諸思想や諸境界の上にふりかけ覆っている部分と、或いは取り出した、李通玄とは全く関係のない諸思想や諸境界を李通玄に由来する諸思想や諸境界とまぶし混ぜ合わせている部分とから成り立っていると、筆者には思えるからである。今、筆者は『南宗禅の祖は李通玄である』と『神会は坐禅の否定や戒の思想も李通玄から学んだ』と『李通玄と神会と六祖壇経』とを執筆中である。特に三番目の拙書に於いて『六祖壇経』の成立事情や思想内容について詳しく論究しているので、『六祖壇経』についてはこの三番目の拙書（近日中に、三種の拙書すべて東大赤門前の山喜房仏書林より発売予定）を御参照いただけるものならば幸いである。

あとがき

李通玄の研究を始めて約四十年、筆者は、この歳（現在、六十八歳）になって、このような論文を書くことになるとは夢想だにしなかった。約千三百年間も、禅界の、或いは華嚴界の片隅に追いやられていた李通玄。不当な扱いを受けてきた李通玄。ようやく陽が当たる所に居場所を得たというわけである。さぞかし、李通玄は溜飲を下げ、快哉の叫び声を上げていることであろう。法蔵、澄観、宗密に代わって、李通玄の時代が千三百年ぶりにやって来たということであろうか。

筆者の恩師の鎌田茂雄先生が、いつの頃だったか忘れてしまったが「私は宗密の研究で学士院賞をもらっているのです、とても公には言えないが、小島君だけには言うておくよ（筆者は東大での鎌田先生の唯一人の直弟子であったので）。宗密しゅうみつという言葉は、とんでもない悪者わるもので、中国一の大ウソつき者なんだよ。だから宗密が言っていることを否定すれば、それが本当の中国仏教だよ。みんな知らずに宗密を基準

にして、いろいろと研究しているけれど、みんな大ウソの研究になってしまってるヨ。勿論、私の研究だって全部、大ウソだよ」とおっしゃった。今さらながら恩師の炯眼に脱帽せざるを得ない。

李通玄が主著の『新華嚴経論』四十巻を著したのは、前述した如く李通玄が七十五歳から八十五歳にかけての時である。李通玄と共に生きてきた筆者であるので、これからも李通玄を見習い、筆者は、まだまだ準備のレベルにあると考え、七十五歳から八十五歳の間におおしごと大仕事ができるように、その準備ということで、さらなる精進を重ねたい。

平成二十七年九月二日

真義臨濟禪宗 宗祖
華嚴学研究所 所長 小島岱山
博士(文学)

富士北麓 華嚴三聖円融觀法修禪堂にて記す。

著者略歴

昭和二十二年（一九四七年） 東京生まれ。
昭和五十一年（一九七六年） 東京大学文学部印度哲学科卒業。
昭和六十一年（一九八六年） 東京大学大学院人文科学研究科博士課程満期修了。
平成 七年（一九九五年） 東京大学にて博士（文学）号を取得。
平成二十六年（二〇一四年） 四月に臨済宗向嶽寺派向嶽寺僧堂師家を自主退任。同年七月、李通玄と臨済義玄と大慧宗杲とに依る真義臨済禅、真義臨済宗を創唱。

現在

真義臨済宗 宗祖。真義臨済禅 師家。
華嚴学研究所 所長。東京大学仏教青年会坐禅会 師家。東京大学 E M P 講師（無の哲学、無の文化の講義。並びに公案禅指導）。

神会は無念の思想と境界とを李通玄から学んだ

平成二十七年（二〇一五年） 九月十日 初版発行
同年 十月十日 改訂版発行

著者 小島 岱 山

発行者

発行所 華嚴学研究所

東京都羽村市羽加美四一十二一三

電話 〇四二一五五四一―二二八

F A X 〇四二一五七九一―一五二八

発売所 山喜房佛書林

東京都文京区本郷五―二八―五

電話 〇三―三八―一―五三六一

F A X 〇三―三八―一―五五五〇



本体1,000円+税

ISBN 978-4-7963-0258-6 C3015 P1000E